

過去の道徳的／非道徳的行動の想起が向社会的意図に及ぼす影響 —Jordan, Mullen, & Murnighan (2011) study 2 の追試的検討—

小林 麻衣 (立正大学心理学部)

Effect of recalling past moral/immoral actions on prosocial intentions:
A replication experiment

Mai KOBAYASHI (*Faculty of Psychology, Rissho University*)

Abstract

This study examined the moral-licensing effect and the compensation effect of immoral actions, as a replication of Jordan, Mullen, & Murnighan (2011). The hypothesis suggested that people who recalled past moral actions reduced prosocial intentions as compared to control conditions, whereas people who recalled immoral actions increased prosocial intentions as compared to the control condition. As a result of the experiment, the hypothesis was not supported. The author discussed the implications of these findings and draw avenues for future research.

Key words : self-regulation, moral-licensing, replication

モラル・ライセンシング効果とは、先行の道徳的な行動が後続の非道徳的な行動を正当化する認知バイアスのことである (e.g. Khan & Dhar, 2006; Monin & Miller, 2001; Sachdeva, Iliev, & Medin, 2009)。たとえば、道徳性を求められるような職業や立場にある人 (例: 教員、親) が、普段なら自己制御できるはずの非道徳的な行為 (例: 不倫) に手を染めてしまうことが挙げられる。それでは、なぜモラル・ライセンシング効果は生じるのだろうか。

そのプロセスは自己完全性理論 (Gollwitzer & Kirchhof, 1998; Wicklund & Gollwitzer, 1982) から説明することができる。人は普段から道徳的な自己イメージをもつことに価値をおき、「道徳的な自己」であり続けようと目標追求する (e.g., Mead, Baumeister, Gino, Schweitzer, & Ariely, 2009)。このような道徳的な自己イメージを維持できたとき、人は完全性の感覚を感じ、後続の行動において「道徳的」な目標に対する努力を弱めてしまう (Gollwitzer, Wicklund, & Hilton, 1982)。つまり、道徳的な行動を行ったという「ライセンス」が非道徳的行動を行うことに対するブレーキを弱めるといえるだろう。一方で、道徳的な自己イメージの維持に失敗したり、ネガティブなフィードバックを受け取ったりすると、不完全性の感覚を感じるようになる。そのため、その不完全性の感覚を補償しようと道徳的な目標に対する努力を強めようとする。たとえば、ゴミを落としたまま拾わずに知らないふりをしたとき、道徳的な自己イメージに対して不完全性の感覚を感じ、

その後の行動でいつも以上に人の手助けをしようとすることが挙げられる。

自己完全性理論に基づいてモラル・ライセンシング効果を検討した研究として、Jordan, Mullen, & Murnighan (2011) がある。この研究では3つの実験を通して、過去の道徳的 (または非道徳的) な想起が、道徳的アイデンティティや向社会的意図、非道徳的行動に影響を及ぼすかについて検討を行っている。Study 1 では非道徳的行動の補償効果を検討しており、過去に行った非道徳的行動の想起をした人は道徳的行動を想起した人よりも、自身の道徳的アイデンティティを他者に示そうとすることが明らかにされた。Study 2 では、study 1 の結果が道徳的・非道徳的思考の誘導によるものなのかを確認するため、自己についてのネガティブまたはポジティブな感情価の思考の誘導 (Forgas, 1998) 条件、さらに統制条件を加え、向社会的意図に及ぼす影響を検討している。その結果、過去の非道徳的行動の想起が、後続の向社会的意図を増加させた一方で、過去の道徳的行動の想起は後続の向社会的意図を減少させていた。また、道徳に無関係なネガティブまたはポジティブな行動を想起した人には向社会的意図への影響は生じなかった。Study 3 では、自分または他者の道徳的行動の想起が後続の非道徳的行動 (不正) や難しい課題を完了することに固執するかどうかを検討している。その結果、自己に関する非道徳的行動を想起した人は、自己に関する道徳的行動を想起した人に比べて、より不正が少なかった。また、自己に

関する道徳的行動を想起した人は、自己に関する非道徳的行動を想起した人に比べて、すぐに不正をしやすく、課題に固執しにくかった。一方でこのような不正や固執への影響は他者想起条件ではみられなかった。つまり、Jordan et al. (2011) では3つの実験を通して、モラル・ライセンシング効果と非道徳的行動後の補償効果が実証されているといえる。

同様の検討を行った研究について、日本では自己制御領域におけるセルフ・ライセンシング効果(櫻井・渡辺・唐沢, 2015)が確認されているものの、道徳性に焦点をあてたモラル・ライセンシング効果及び非道徳的行動後の補償効果については未だ検討されていない。そこで、日本においてJordan et al. (2011)の結果の再現性を確認することが重要であると考えられる。

最近では、モラル・ライセンシング効果の文化差について、Simbrunner & Schlegelmilch (2017)がメタ分析を行っている。この研究では、モラル・ライセンシング効果が宗教に対する重要度などの文化的背景に影響を受けやすいことが示されている。たとえば、宗教の重要度が高い地域(北アメリカ)の方が、低い地域(西ヨーロッパ)に比べてモラル・ライセンシング効果が強いことが示されている。また興味深いことに、東アジアにおいてモラル・ライセンシング効果の影響がみられていないことが示唆されている。これについてSimbrunner & Schlegelmilch (2017)は、文化による時間志向性の違いが効果の影響に関わっていると説明している。平均的な東アジアの人は、北アメリカや西ヨーロッパに比べて「現在」への時間志向性が弱く(Rojas-Méndez et al. 2002)、モラル・ライセンシング効果で一般的に行っている実験の時間内では先行の行動が後続の行動に影響しにくい可能性があると考えられる。以上のように文化差の問題はあるが、本研究では日本におけるモラル・ライセンシング効果研究の足掛かりとして、まずは先行研究(Jordan et al., 2011; study 2)の手続きに倣って追試を行い、モラル・ライセンシング効果の検証を行う。

本研究の目的は、Jordan et al. (2011) study 2の追試として、道徳的(または非道徳的)行動が後続の向社会的意図を促進するかを検討する。本研究では2つの仮説として、道徳的行動の想起条件は統制条件に比べて向社会的意図が低い(仮説1)、非道徳的な行動の想起条件は統制条件に比べて向社会的意図が高い(仮説2)と予測する。また、Jordan et al. (2011) study 2と同様に、道徳的・非道徳的思考の誘導によるものなのかを確認するため、道徳には無関係な自己についてのネガティブまたはポジティブな感情価を想起する条件、そして統制条件を加える。ネガティブ想起条件、ポジティブ想起条件は、統制条件と有意な差はなく、

向社会的意図に対する効果はみられないと考えられる。

方法

参加者 大学生95名(男性46名・女性49名;平均年齢19.74歳, $SD=1.34$)

手続き 授業の一部の時間を利用して「実験刺激作成のための予備調査」という名目で質問紙実験を実施した。はじめに実験参加に関する確認をとって、実験協力が強制ではないこと、実験に協力できない場合は回答しなくても良いこと、実験に協力しなかったことで履修している授業や成績等に影響がでることは一切ないこと、分析は匿名で行われることなどについて説明を行った。

実験では、実験参加に承諾した参加者に対して、5種類(想起内容:「道徳的行動」、「非道徳的行動」、「道徳とは無関係なポジティブな行動」、「道徳とは無関係なネガティブな行動」、「統制」)の質問紙が無作為に配布された。

質問紙の構成 Jordan et al. (2011)に倣い、参加者自身の過去の行動について想起し、その行動についてのエッセイを書くよう求めた。はじめに、「過去にあなたがおこなったXXXについて思い出してください。」と明記し、XXX箇所は条件によって内容が異なっていた。各条件のXXX箇所に入る内容は以下のとおりである:(1)道徳的行動条件「人として良い行い(善悪において「善」とされる行為)」、(2)非道徳的行動条件「人として悪い行い(善悪において「悪」とされる行為)」、(3)道徳とは無関係なポジティブ行動条件「重要な目標が達成できたときの行動」、(4)道徳とは無関係なネガティブ行動条件「重要な目標が達成できなかったときの行動」、(5)統制条件「典型的な火曜日の過ごし方」であった。

次に、Jordan et al. (2011)と同様に、フィラー課題(道徳とは無関係な質問10項目)後に「行動に対する意図(来月までにどれくらいそれらの行動をしたいと思うか)」について7件法(+3非常にしたい〜-3全くしたくない)で尋ねた。行動に関する項目は全12項目あり、向社会的行動7項目(ボランティア、ドナー登録、困っている人を助けてあげる、募金、献血、人の手伝いをする、電車やバスで席を譲る)の他に、フィラー5項目(例:海外旅行に行く)によって構成されていた。

実験計画 1要因5水準(道徳/非道徳/ポジティブ/ネガティブ/統制)の参加者間計画であった。

結果と考察

主な想起内容 回答者が挙げていた各条件の想起内容は、道徳条件では「困っている人を助ける行動」、非

道徳条件では「悪口や暴力に関連する行動」が多かった。また、ポジティブ条件では「志望校への合格」、ネガティブ条件では「受験の失敗」、統制条件では「大学やアルバイトをする」ことが多く挙げられていた。

向社会的行動の指標 「向社会的行動に対する行動意図」を得点化するため、向社会的行動7項目に対して主成分分析を行った。その結果、説明率は57.82%であり、1つの成分において全ての項目の因子負荷量が.40を超えていた。また信頼性分析の結果、 $\alpha = .85$ と信頼性においても妥当な数値であったため、向社会的行動の7項目の平均得点を算出した。

仮説の検証 向社会的行動の平均得点を従属変数とし、実験操作5条件を独立変数とした一元配置の分散分析を行った。その結果、有意な主効果はみられなかった ($F(4,78) = .31, ns$; Figure 1)。また、向社会的行動の項目別に同様の分析を行ったが有意な主効果はみられなかった ($F = .47 \sim 1.04, ns$; Table 1)。したがって、

2つの仮説は支持されず、Jordan et al. (2011) の結果は再現されなかった。

本研究では、モラル・ライセンシング効果及び非道徳的行動における補償効果について検討したが、2つの仮説はどちらも支持されなかった。その理由として、以下の3つが考えられる。

1つは、本研究では道徳的自己イメージに対する脅威が弱かった可能性がある。モラル・ライセンシング効果は、非道徳的行動を想起した後に道徳的自己に対する不完全性の感覚に脅威を受けることで生起するといわれている。しかし、本研究ではJordan et al. (2011) と異なり、大学生を対象として検討を行ったことが道徳的自己への脅威を弱めたことの要因となったと考えられる。たとえば、Jordan et al. (2011) では成人 (平均年齢31.61歳, $SD = 10.25$) を対象としており、大学生に比べて普段から仕事や立場 (例：子どもを持つ親) により道徳性が求められる状況が多かったことが挙げ

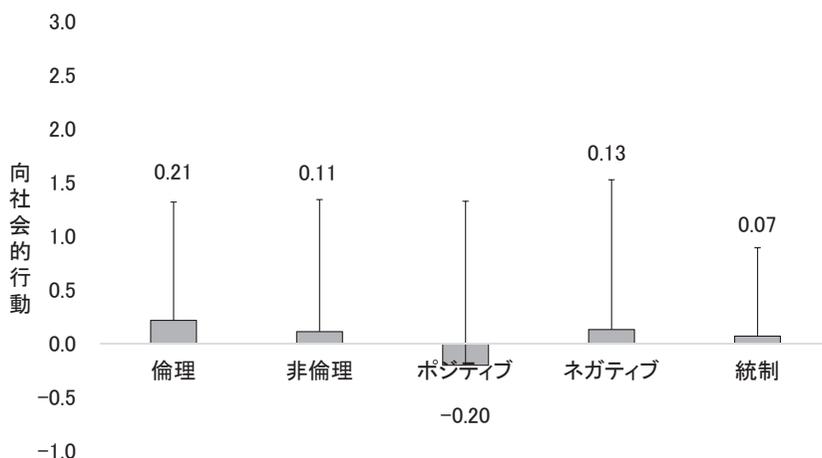


Figure 1 向社会的行動に対する各条件の平均値と標準偏差

Table 1 向社会的行動7項目に対する各条件の平均値と標準偏差

	倫理		非倫理		ポジティブ		ネガティブ		統制	
	M	SD								
ボランティア	-0.19	2.01	-0.59	1.54	-0.95	1.77	-0.30	1.70	-0.32	1.53
ドナー登録	-0.13	1.67	-0.59	1.91	-0.90	1.92	-0.30	2.21	-1.11	1.63
困っている人を助ける	1.31	1.30	1.00	1.50	0.62	1.69	1.10	1.73	1.21	1.23
募金	-0.63	1.75	-0.53	1.84	-0.67	1.93	0.30	1.49	-0.32	1.49
献血	-0.69	1.49	-0.41	2.00	-0.86	1.98	-0.90	2.08	-1.42	1.43
人の手伝いをする	0.56	1.15	1.00	1.32	0.57	1.72	0.60	1.58	1.32	1.11
電車やバスで席を譲る	1.25	1.57	0.88	1.76	0.76	1.89	0.40	1.78	1.11	1.63

られる。つまり、成人の参加者の方が大学生に比べて、より道徳的自己イメージに脅威を受けやすかった可能性がある。今後は成人の参加者を対象として再検討することが重要であると考えられる。

2つ目は、道徳的行動の想起による道徳プライミング効果の影響である。道徳条件の参加者にとって、過去の道徳的行動を想起することで向社会的性に対する動機づけが活性化し、向社会的行動に対する行動意図がより高まった可能性は否定できないと考えられる。

最後に、モラル・ライセンシング効果の文化差の問題である。先述したとおり、Simbrunner & Schlegelmilch (2017) のメタ分析では東アジアにおいてモラル・ライセンシング効果がみられておらず、本研究の結果もそれを支持するものであった。今後は、本研究で得られた結果が文化差によるものなのか、または方法論上の問題によるものなのかを検証することが課題となる。具体的には、一般の成人を対象として再度追試を行い、同様の結果が得られるかどうかを確認していく必要があるだろう。

引用文献

- Forgas, J. P. (1998). Asking nicely: The effects of mood on responding to more or less polite requests. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *24*, 173-195.
- Gollwitzer, P. M., & Kirchhof, O. (1998). The willful pursuit of identity. In J. Heckhausen & C. S. Dweck (Eds.), *Life-span perspectives on motivation and control* (pp. 389-423). New York, NY: Cambridge University Press.
- Gollwitzer, P. M., Wicklund, R. A., & Hilton, J. L. (1982). Admission of failure and symbolic self-completion: Extending Lewinian theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, *43*, 358-371.
- Jordan, J., Mullen, E., & Murnighan, J. K. (2011). Striving for the moral self: The effects of recalling past moral actions on future moral behavior. *Per-*

- sonality and Social Psychology Bulletin*, *37*, 701-713.
- Khan, U., & Dhar, R. (2006). Licensing effect in consumer choice. *Journal of Marketing Research*, *43*, 259-266.
- Mead, N. L., Baumeister, R. F., Gino, F., Schweitzer, M. E., & Ariely, D. (2009). Too Tired to Tell the Truth: Self-Control Resource Depletion and Dishonesty. *Journal of Experimental Social Psychology*, *45*, 594-597.
- Monin, B., & Miller, D. T. (2001). Moral credentials and the expression of prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, *81*, 33-43.
- Rojas-Méndez JI, Davies G, Omer O, Chetthamrongchai P, Madran C (2002). A time attitude scale for cross cultural research. *Journal of Global Marketing*, *15*, 117-147.
- Sachdeva, S., Iliev, R., & Medin, D. (2009). Sinning saints and saintly sinners: The paradox of moral self-regulation. *Psychological Science*, *20*, 523-528.
- 櫻井 良祐・渡辺 匠・唐沢 かおり (2015). 既達成の目標によるセルフ・ライセンシング：社会的排斥時における自己制御過程に着目して 日本社会心理学会第56回大会発表論文集, 134.
- Simbrunner, P. & Schlegelmilch, B. B. (2017). Moral licensing: a culture-moderated meta-analysis. *Management Review Quarterly*, *67*, 201-225.
- Wicklund, R. A., & Gollwitzer, P. M. (1982). *Symbolic self-completion*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

注

- 1) この研究は平成28年度東洋大学井上円了記念研究助成を受けて実施した。
- 2) Sachdeva et al. (2009) では、道徳的自己に独自にアクセスするよりも自己のネガティブまたはポジティブなイメージを活性化させる方が、後続の道徳的意図を変化させていた。

要約

本研究では、Jordan et al. (2011) study 2 の追試として、モラル・ライセンシング効果及び非道徳的行動における補償効果について検討を行った。仮説は、過去の道徳的行動を想起した人は統制条件に比べて、向社会的意図を減少させる一方で、非道徳的行動を想起した人は統制条件に比べて、向社会的意図を増加させると予測した。実験の結果、仮説は支持されなかった。仮説が支持されなかった理由について考察がなされた。

キーワード：自己制御、モラル・ライセンシング効果、追試